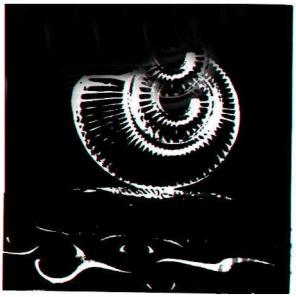
愛と闘いの序章

渡辺理恵子



渡辺理恵子

愛と闘いの序章

スモンと共に歩んだキャンパスの青春

立風書房

愛と闘いの序章

昭和50年12月25日　第1刷発行

愛と闘いの序章

著　者　渡辺理恵子

発行者　下野　博

発行所　株式会社　立風書房

東京都品川区東五反田3の6の18

電　話（〇三）四四七―一一九一

振替口座　東京　五―七四四九三

印刷所　信毎書籍印刷㈱

㈱美術版画社

製本所　大和工業㈱

© RIEKO WATANABE 1975

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

680-

Printed in Japan 0095-R7306-8909

●愛と闘いの序章／目次

序　章　学園への道　5
第一章　白い風の中で　19
第二章　青葉のしずくわが心　69
第三章　冬の枯野をたどり来て　119
第四章　キャンパスの青春　165
第五章　くちなしの花の匂うとき　227

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

愛と闘いの序章

装幀　多田　進
カバーフォト　福田　匡伸

序章　学園への道

大学の門からまっすぐに続くイチョウ並木が、二、三日前から濃緑色に色づきはじめたのが私の目にもよくわかる。葉のすきまから、ちらちらともれてくる夏の夕日がとてもまぶしい。道ばたの、手入れのゆきとどいた家々の庭から、甘ずっぱい花の匂いが漂ってくる。成城の街を包む夕方の空気を、体のすみずみまで吸いこみながら、私はこの時、小さな満足感をおぼえた。

この舗道を、毎朝、毎夕、私のあぶなっかしい四本の足が跡をつけるようになってから、もう四年近くもたってしまった。二本のクラッチをついて、ひざ下まである補装具をはいて、ひょろひょろと歩くやっこだこのような私の姿を、きっとこの街で知らない人はいないのではないだろうか。

曲がり角で、赤いスカートをはいた、足の短かい女の子が、

「ドチテ、ソウヤッテ、アルイテンノ？」
って私に声をかけたので、ニコッと笑って、
「名誉の負傷よ」
って言ったら、女の子はキョトンとして私を見つめていた。私はそのあと、心の中でひそかに、
「薬のせいよ」
という言葉をつけ加えた。
黒光りする外車や、真赤なスポーツカーの止まっている豪華な家のまえを、カチャカチャと物憂げな音をたてて歩くのは、ちょっと気がひける。この頃、クラッチのねじが一本とれていて、歩くたびに大げさな音がするようになった。
「あなたが歩いてくると音ですぐわかるわ」
と友人が言うから、今に東京都から騒音公害で摘発されるのではないか…と、とても心配だ。
立派な家並の街をぬけ、車の通りの激しい道を渡ろうとしていると、タクシーの運転手が徐行しながらこちらを見て通りすぎていく。考えてみると、これまで私は大学への行き帰りに、タクシーを利用したことは一度もない。足が痛くて、足を前に出すのがやっとの日もあったし、体が疲れて、タクシーに乗って帰ってしまおうかな、と思って手を半ばあげかけた時もあったのだけれど、ついに歩きとおしてしまった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

その道を横断してしまうと、もう私のお宿は目と鼻の先になる。四畳半と台所のついた北向きの家、これが私のいわばセカンドハウスである。ドアをあけて、勝手口にドカッと腰をおろすと、はじめてホッとして体の重みがスーッとぬけていくようだ。装具のバンドをはずして靴をぬぐ。靴のそこは、もう相当すりへってしまって、特につま先がへこんでいる。ひょっとすると中味が見えてきそうだ。しかし、それももっともである。あっちにつまずき、こっちにひっかかり、そして雨の日は長靴のかわりになるんだもの……。

この靴のへりが示すように、私は歩き続けてきた。入院している間も、そして退院してからも、歩くことだけが私をささえてきたのだ。

大学に復学する前の、まだ郷里の郡山にいた頃も、朝がすっかりあけやらないうちから、母と二人で家の近くの道を一生懸命に歩いた。ただ大学の門を想い、教室を想い、階段を想像して歩いたのだ。ゴロゴロ小石のころがった凸凹道や、雑草のおいしげった畦道(あぜみち)は、私のよいトレーニング場だった。刺すように冷たい空気が頬にふきつける朝もあったし、吹雪で前がよく見えない日もあった。

最初は小石ひとつにもおぼつかなかった私の足も、どうやら一歩一歩と距離をのばすことができ、今はなんとか大学と下宿の間を歩くことができるようになった。といっても水たまりはこえられないし、石ころも大敵だ。

大学までは普通の人は五分もあれば行けるが、私には二十分もかかる。だから私の靴は私のこれまでの歴史だ。

そう言えば、私が郷里での毎朝の訓練中、忘れられない一つの光景がある。

ある年の元旦の朝のことだった。

小雪が農道の上に舞い、東の空がほんのりと紅に染まって、雪がその光をあびて無数の美しい色に輝いていた。私はこんなファンタスチックな世界が、自分のすぐ近くに存在していたことに大きな喜びを感じた。しばらくたって、オレンジ色のきらきら光る新年の太陽が東の空にあらわれた時、それが私に向かって進んでくるような気がした。私はその時、あれは私のところにやってくるんだ、途中で何かがあれを隠してしまうかもしれないけれど、あれはきっと私のところに来るんだ、と胸をわくわくさせながら確信したものだった。

高校を卒業して、大学受験の終わった後、大学生活を楽しむことなしに病気になってしまった私だったけれど、ある時いっそう心の中に燃えてきたものがあった。私は自分の青春を大学に復学することにかけた。

「そんな体で大学に行くなんて」

「大学になんて行ってもしょうがない」

そんな声もあった。しかし、私にとって大学とは、普通の人のそれとは違っている。それをやり通すことが私の人生になったのだ。

せまってくる元日のオレンジ色の太陽は、きびしさの中にやさしさを持って、私の前途を励ましているようだった。

そして今、私は両親の全面的な理解と支援と、まわりの人達の暖かい援助によって、三年間、大学を休学した後、再び大学にもどり、今までかよい続けている。スモンという文字が私の頭から離れなくなった日から、私がめざしてきた大学、それが今、私の手の中で完全に私のものになろうとしているのだ。

いつまでも勝手口になど腰をかけて、感傷や思い出にふけっていることはできない。これから洗濯もしなければならないし、八百屋さんに電話をかけて、野菜を持ってきてもらわなければならない。夕食の用意も、あすの予習もしなければならない。ぼんやりしてはいられないのだ。

帰ってしばらくたつと、トントンとドアをたたく人がいる。八百屋さんかな、牛乳代の集金かなと思って、ドアチェーンをしたままあけると、ちょっと目のするどい中年の男の人が立っている。その男の人の、

「あ、渡辺さん、〇〇新聞ですが、お宅では何新聞をとっていますか？」

という言葉で、私は〝またかあ〟と思った。

「うちでは新聞はとらないんです」

と言うと、
「今どき新聞をとらない家なんてありませんよ。あなた学生さんでしょう。新聞ぐらい読んだらどうですか」
と、私が文字を読めないことへのあせりの感情をかきたてるようなことを言う。私だって、新聞が自由に読めたらどんなに楽しいだろうなあって思うけど、新聞の小さな字を拡大鏡で無理に見ようとすると、目がヒリヒリして、あけていられなくなってしまうんだもの……。でも、新聞が読めなくたって、毎日ラジオにかじりついているから、どうにか世の中の一般的な出来ごとは知っているつもりなんだけど……。
その男の人と二言、三言、会話をした後、
「うちでは、おじいちゃんもおとうちゃんもおにいちゃんも弟も(女の一人暮らしと思われるとこわいから)、みんな目が悪いんです。だから新聞はとらないんです」
って、大きな声で言ってやったら、その男の人、実に奇妙な、申しわけなさそうな、なんとも言えない表情になって、
「ああ、どうも……」
とかなんとか口の中で言いながら、帰って行ってしまった。下宿をしている友達で、断わりきれなくなって、二つも三つも新聞をとっている人がいるそうだから、私の腕はまあたいしたものだ。
洗濯を終えると、もう外はうす暗くなっていた。夕食の用意のために冷蔵庫をあけて、

あれやこれやと物色すると、二つ三つ組みあわせて人間の食物になりそうなものがでてきた。きょうはぐっとポピュラーなところで、カレーライスにしようかしら。

私の台所には小さい車のついた事務用の回転イスがある。流しに長いあいだ立っていると、だんだん腰が痛くなってくるので、そんな時はイスにすわったまま、じゃがいもをむいたり、流しと冷蔵庫と調理台の間を往復したりするのである。と言っても、とても狭い空間なのだけど、でも、ちょっとうっかりして、下に落ちたものを拾おうとすると、イスの方がひとりでにうしろに走っていってしまって、私のおしりは空間で〝一瞬どうしようかな〟とためらった後、ドスンと床に急降下してしまう。それも手に包丁なんかを持ったままだから、私の調理（？）というのは命がけなのである。でも、この頃はすっかりコツを心得て、そんな失敗も少なくなった。

食べられる物ができる頃には、なんとなく疲れてしまっていて、食べるのがめんどうくさくなる。うすぼんやりした裸電球の下に寄せ集めの茶碗や皿を、ままごと遊びのように並べて、色の冴えない料理を、淡々と機械的に口へ運ぶ。しかし、別にわびしいともおいしくないとも思わない。ただ、食べ終えればいいのである。そして一食、食べ終えるごとに、私は私がめざしている何かにむかって、一歩近づいたような気持になる。

突然、電話のベルがなりだした。私は食事の後かたづけを半分にして、電話の方に全速力で走り出す。と言っても、よっこらよっこらと物につたわりながら行くのだけれど……。

この電話は、私の部屋にあるたった一つの高級品で、行動範囲の狭い私の生活になくてはならぬ必需品である。電話は母からだった。
「どうお？　元気？」
「元気よ。お父さんとお母さんは？」
「元気だよ」
などとナンセンスな会話で始まるのが私達の会話の通例である。なにしろ、私はちょっと疲れて気分が悪くたって、母には「元気よ」と言っておくし、母だって体が弱いからいつも元気でいるはずなんかないのに、電話ではいつも「元気だよ」と言う。お互いに相手を安心させようと気をつかっているのだ。でも、それをお互いに了解しながら、「元気？」って聞いてみないと落ちつかないのが親子らしい。親子の間柄って、なんだかあったかくて、くだらなくて、不思議ないいものだ。
「あなたは一人っ子なのに、その体でよく両親が東京に出したわねえ」
とよく言われる。
「うん、うちの親はユニークだからね」
などと、わかったようなことを言って答えるけど、自分の両親ながら、よく出してくれたと感心する。
私が健康だった時は、「大学か、行きたかったら反対はしないよ」っていう感じの父だったが、体に障害ができてからは、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.